

## 脳血管疾患により失語症となった高齢者とともに生活する家族の「暮らしやすさ」尺度の開発

|       |  |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2014-06-10<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 鈴木, 麻美<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="http://hdl.handle.net/10470/30591">http://hdl.handle.net/10470/30591</a>                  |

|         |  |
|---------|--|
| 氏名      | : 鈴木 麻美  |
| 学位の種類   | : 博士 (看護学)   |
| 学位記番号   | : 甲第 24 号  |
| 学位授与年月日 | : 平成 26 年 3 月 6 日  |
| 学位授与の要件 | : 学位規則第 4 条第 1 項該当   |
| 論文題目    | : 脳血管疾患により失語症となった高齢者とともに生活する<br>家族の「暮らしやすさ」尺度の開発<br>: Development of a scale for measuring the “wellness of<br>living” of the family of elderly stroke patients with<br>aphasia. |
| 論文審査委員  | : 主査 教授 水野 敏子<br>副査 教授 柳 修平<br>教授 下平 唯子  |

## 博士論文要旨

### I. はじめに

失語症はコミュニケーションの障害であり、社会生活を営む上で看過できない障害である。なかでも高齢になってから発症した失語症者の転帰は不良であり、注目すべき人々であるにもかかわらず、医療者や社会から理解されないことが多い。しかし、これまでの研究から、失語症者とその家族は、様々な負担や困難を抱えていることが明らかになっている。私は、これまでに高齢失語症者の家族は、経験をもとに自ら気づきを得て、知恵を形成し、その知恵を元に新たな経験をすることを繰り返し、より自分たちらしい、暮らしやすい生活を目指していることを明らかにしてきた。しかし、その一方で、暮らしにくい状況が遷延する家族もあり、このような高齢失語症者やその家族に対する何らかの支援が必要と考える。そこで、支援が必要な高齢失語症者の家族を見出すために暮らしやすさの程度を簡便に測定できる尺度を作成し、その信頼性・妥当性を検証した。

本研究における暮らしやすさとは、高齢失語症者の家族が経験を積み重ね、自ら様々な気づきを得ることで、家族自身が意識するしないにかかわらず、自分自身を変化させて、無理せず、楽に、穏やかに日々生活していけるように進化している程度を示しているものと定義した。

### II. 方法

#### 第 1 段階：暮らしやすさの構成概念抽出と尺度の原案作成

前回調査（2009 年度修士論文）で得られた高齢失語症者とともに生活する家族 12 名の語りを質的帰納的に再分析し、暮らしやすさの構成概念として 5 領域〔言葉へのこだわり〕〔失語症者との関係性〕〔束縛感〕〔孤立感〕〔病気をした失語症者との日常生活〕を抽出した。質問項目は、分析過程のコードの意味内容を考慮し、質問文に置き換え、合計 41 項目の尺度原案を作成した。

## 第2段階：暮らしやすさ尺度の作成と信頼性・妥当性の検討

60歳以降に脳血管疾患により失語症となり、現在、自宅で生活している人の家族を対象に質問紙調査を実施した。データ収集は、全国の51の失語症友の会、デイサービス6施設、および6病院で行った。

調査内容は、対象者の属性と暮らしやすさ尺度原案、妥当性検証のため、GHQ精神健康調査票12項目短縮版(GHQ-12)、日本語版 Zarit 介護負担尺度短縮版(J-ZBI\_8)、コミュニケーション関連の介護負担感尺度(COM-B)、首尾一貫感覚尺度13項目短縮版(SOC-13)を用いた。

分析は、暮らしやすさ尺度原案の項目分析を行い、その後、探索的因子分析、確認的因子分析と分析を進め、因子構造を確認した。信頼性はCronbach's  $\alpha$ 係数を用いて検討し、併存妥当性は、既存の4つの尺度との相関係数を用いて検証した。これらの分析は、IBM SPSS Statistics Base22.0J for Windows、IBM SPSS Amos 22.0J for Windowsを用い、統計的有意性は $p < 0.05$ 未満で有意性ありと判断した。

倫理的配慮：研究参加は自由意志とし、無記名の調査票を用い、調査票の返送をもって同意を得た。本研究は、東京女子医科大学研究倫理委員会の承認を得た上で実施した(承認番号：2633)。

### III. 結果

調査票は、885部配布し315部(回収率35.6%)回収された。このうち、選定条件に合わない対象者や未記入項目のある調査票は除外し、199部(有効回答率22.5%)を解析対象とした。

高齢失語症者の家族は約9割が女性で年齢は $67.0 \pm 8.7$ 歳、失語症者との続柄は約9割が夫婦であった。介護期間は $71.0 \pm 54.8$ ヶ月であった。失語症者は平均 $72.8 \pm 5.6$ 歳であり、約半数が実用的な言葉を話すことができない重度の失語症であった。

尺度の作成はまず、I-T相関や質問項目間の分析により10項目を除外し、31項目で探索的因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行った。分析を繰り返し、最終的に5因子21項目の質問項目を採択した。尺度全体のCronbach's  $\alpha$ 係数は0.841であり、下位尺度は、第1因子より順に0.786、0.758、0.789、0.671、0.693であった。抽出された第1因子(6項目)は【失語症者との関係性の深まり】、第2因子(5項目)は【言葉を介した言葉の理解】、第3因子(3項目)は【失語症者のための奮闘】、第4因子(4項目)は【生活のゆとり】、第5因子(3項目)は【周囲からの大変さの理解】と命名した。5因子のうち、第1、2、3、5因子は、仮説的構成概念とほぼ同様の構造であったが、第4因子は複数の領域の質問が混在していた。確認的因子分析による5因子構造のモデルの適合度は $\chi^2=266.48$ 、 $df=180$ 、 $p=0.000$ 、 $GFI=0.883$ 、 $AGFI=0.850$ 、 $CFI=0.916$ 、 $RMSEA=0.051$ 、 $AIC=368.48$ であった。基準関連妥当性は、暮らしやすさ尺度全体とGHQ-12、COM-B、J-ZBI\_8の全体得点との関連を検討し、 $r=-0.496 \sim -0.594$ ( $p < 0.01$ )を示した。SOC-13との相関は、 $r=0.360$ ( $p < 0.01$ )であった。

### IV. 考察

#### 1. 暮らしやすさ尺度の信頼性・妥当性

信頼性については、暮らしやすさ尺度全21項目のCronbach's  $\alpha$ 係数が0.7を超えており、内的整合性が確保できた。しかし、【生活のゆとり】は、今回新たに見出され

た概念であり、尺度項目については今後さらに検討を重ねていく必要がある。妥当性については、仮説的構成概念との比較や確認的因子分析の結果から、構成概念妥当性が確保された。また、基準関連妥当性においても、暮らしやすさ尺度全体と既存尺度との相関係数から、妥当性が確認された。

## 2. 暮らしやすさ尺度の有用性

暮らしやすさ尺度は、これまでに開発されている介護負担感とは異なり、高齢失語症者と家族の相互作用に注目し、無理なく生活していけるよう進化している程度を測定する高齢失語症者との生活を前向きに捉えようとする尺度である。この尺度は、21項目で構成されており、暮らしやすさを簡便に測ることができる。また、生活の困難さが見えにくい失語症者の家族ではあるが、この尺度を用いることで、暮らしにくさの要因がわかり、支援すべきポイントが分かりやすいことから実用性の高い尺度である。得点化できるため、暮らしやすさの変化や支援の効果を確認することも可能である。今後は、データを蓄積し、暮らしやすい方向に向かうために必要な支援を検討し、介入プログラムを作成していくことが重要である。

## 審査結果の要旨

平成26年2月13日、柳修平教授、下平唯子教授の2名の副査および水野敏子（主査、教授）の3名からなる審査委員会が開かれ、学位請求論文に対して審査が行われた。

本研究は「暮らしやすさ」の尺度を作成し、その信頼性・妥当性を検証した結果、実用に耐えうる尺度を作成できたことが示された論文である。

脳血管センターでの長年の実践経験から、重大な問題を抱えていながら、身体障害への対応が優先され、社会や医療者にさえも理解されにくい失語症者の問題を、「暮らしやすさ」という看護の視点から、明らかにしようとした貴重な研究であり、この点は審査委員より高く評価されている。本研究は失語症者本人より、生活についての情報を得ることが難しいことから、失語症を伴う高齢者とともに暮らしている家族の側から、家族の暮らしを通して暮らしを理解しようとしたものである。

「暮らしやすさ尺度」は博士前期課程において得られたデータの質的機能的分析により導かれた内容から、最終的に21項目5因子からなる尺度を試みている。構成概念妥当性、基準関連妥当性について妥当性が確保され、信頼性については若干値の低い下位因子はあったものの、全体としては確保されていた。質的分析で得られ初期の「暮らしやすさ」項目が統計的処理の過程で、採用されなかった項目がいくつかあったが、その理由について検討が必要であることが審査員より指摘があった。「暮らしやすさ」は多様な側面を含んでいることから、採用されなかったことも考えられるが、今後さらにデータを蓄積し、精選することを通して考察を深められたい。

文献は詳細に系統だって検討がなされており、暮らしやすさをロジャーズの看護理論を用いて説明することによって、暮らしやすさの方向性を明確に示すことができている。

本研究は、尺度開発の過程が丁寧に踏まれており、研究の質が保たれている。作成された尺度は、暮らしやすさを把握するための簡便で、実用性の高い尺度である点は

審査員より評価を得ている。測定しようとしている生活の側面は多様であるため、今後より多くのデータを蓄積して尺度得点の意味するところを探索し、暮らしやすさに関する有意な情報を導くことが期待できる論文である。

本研究は問題点思考から脱却し、生活の肯定的側面をとらえようとしたところに研究の特色があり、新規性のある取り組みである。

以上により、本論文は、学位規則第4条1項に定める博士（看護学）の学位を授与するに値するものであり、申請者は看護学における研究活動を自立して行うに必要な高度な研究能力を有すると認められ、論文審査および最終試験に合格と判定する。